

## 「レジャー・レクリエーションの史的変遷」

小田切毅一（奈良女子大学教授）

このたびの特別講演で、私に与えられたテーマは「レジャー・レクリエーションの史的変遷」である。レジャーやレクリエーションの歴史は、かの『ホモ・ルーデンス』（J.ホイジンハ）流の言い方を借りるならば、人類の文明の歴史と共に古いと言えるであろう。したがってその史的展開は、本来、古今東西の歴史の広がりの中で語られるべきものと考えられる。しかしながらこの講演では、こうした歴史を、我々の研究対象に直接かかわる、近代の問題にしぼり、とりわけ日本におけるレジャーやレクリエーションの運動史を中心に話題を進めたい。もとより日本レジャー・レクリエーション学会という、本学会の名称の発端となった言葉は「レクリエーション」に他ならないが、この「レクリエーション」という名辞そのものが、まさしく近代社会の所産なのである。よくレクリエーションの語義として述べられる“re-creation”（再創造）という意味は、仕事（本暇）と遊び（余暇）とを対置させ、それらをバランスよくとろうとする近代人の生活観とかかわって、広く社会に受け入れられることになった言葉に他ならない。

レクリエーションという言葉は、歴史の中で長い間、いわば「個人的レベル」の概念を示す言葉として普遍化されてきた。近代英語名辞としてのレクリエーションは、オックスフォード辞典などが示すところによれば、14～15世紀当時には、①「食物摂取による元気回復」や「滋養」の意味から、②「感覚や肉体を刺激する何かによってもたらされる元気回復」や「心の慰安」の意味へと、その意味内容（概念領域）を広げつつあった。そして15世紀以降には、上記二つの意味内容を廃語化させる一方で、③「自らの元気を回復する手段」や「楽しい運動や事柄に従事すること」の意味を成立させることになった。

こうした時代に伴う言葉の意味変容は、この言葉を用いた人々の生活ぶりや彼らがおかれた社会的制約を考えると、興味深い様々な問題を示唆する。最後の③の段階に至って、いわゆる“sports and recreation”といった表記で、青少年などの個人的教養というべき遊びの活動を意味する、今日流の一連の言葉の用いられ方が普遍化されるようになった。

ところでオックスフォード辞典などには記されていないが、我々にとってより重要なこの言葉の意味変容がもう一つあるということを、重要視すべきである。それは、上記の意味の変容や広がり未だに、いわば社会運動というレベルで、社会的概念として用いられるようになったこの言葉の展開である。そしてこうした社会運動を意味するレクリエーションの概念的成立に伴って、研究レベルにおいても、学術的な対象概念としてのレクリエーションが意識されるようになったという歴史的経緯を意識することが重要である。

たとえば子供の遊び場設置の運動から出発して、地域のレクリエーションを発展させ、今日のパブリック・レクリエーションの社会的、行政施策的なシステムを完成させたアメリカのレクリエーション運動は、こうした社会運動のひとつの理想とすべき典型である。いわば歴史の教訓を得ようとする課題意識からみても、こうした問いかけが少なくともわが国のレクリエーション運動の推進や研究に大きな影響を与え、またそれらへの重要な方向性を与えてきたことは、すでに衆知のことである。

レクリエーション運動の運動としての近代史的広がりや、その後世界の先進欧米諸国によって、いわば国家的な施策と結びついた健康づくりや体力づくり運動へと引き継がれて

きている。たとえばドイツにおける戦時中の「歓喜力行運動」や「ワンダーフォーゲル」から、戦後における「ゴールデン・プラン」「第二の道」などが思い出される。

あるいは直接国策と結びつかない運動の展開もなくはない。たとえば青少年の健全な教育という課題と結びついて、民間団体によって現代にまで提唱・展開されてきている種々の活動も、こうした範疇に加えるべきであるように思われる。例えば「ボーイスカウト」や「ガールスカウト」、「YMCA」や「YWCA」などの運動がそれである。言うまでもなく、これら運動の担い手は、時代に応じて変化し、交代し得るのである。

さて、わが国におけるレジャー・レクリエーションは、近代化に伴うわが国の歴史的経緯の中で、どのように運動として変遷してきたのだろうか？ その変化にある種の発展段階が読みとれるとすれば、それは何に基づくのだろうか？ 本講演では、こうした問題意識に応える仮説として、いわゆる「農業型社会」「工業型社会」「情報産業型社会」に基づく三様態に、社会的環境を要素化させることによって、そこに展開した運動と、それに触発されるかたちで動機づけられた研究の関わりに着目しようと思う。レジャーやレクリエーションは言うまでもなく、時代の社会的ありようを反映して生じる物に他ならない。

こうした三つの社会型は、いわゆる「前近代」「近代」「後近代」の区分と基本的に適合するものであるが、こうした段階づけは、近代文明をテーマにした通事的変容を問う場合に、最も基本的な類別法ということが出来る。例えば、農業革命、産業革命、情報革命といった三段階による、G.チャイルドらの文明史的な時代区分も、経済学者C.クラークの有名な産業分類（第一次産業：農・漁業、第二次産業：工業、第三次産業：サービス・流通・教育）も、この他、コミュニケーション史におけるマクルーハン流の、口承段階、活字的段階、触覚的段階（視聴覚的）も、あるいはD.リースマン流の「伝統志向」「内部志向」「他人志向」も、少なからずこうした三段階に対応する視野を持っており、こうした意味で、ある種の普遍的で妥当な尺度とみなすことができるように思われる。

(1)「農業型社会」段階におけるレジャー・レクリエーション

伝統的な在来文化としての遊びの実態と外来文化としての遊びの受け入れ（導入）

(2)「工業型社会」段階へのレジャー・レクリエーションの転換（1938年～1975年）

①運動前史としての厚生運動時代(1938～1946年)

②官制主導によるレクリエーション運動の萌芽期

③職場レクリエーション主導によるレクリエーション運動の発展期

★日本レクリエーション懇談会(1964年3月10日～)

★日本レクリエーション研究会(1965年5月8日発会～)

★日本レクリエーション学会創設期

(3)「情報産業型社会」段階への移行（1970年代後半以降）

①地域レクリエーションへの運動の転換期

②高齢化・小子化に対応する生涯学習時代への運動の移行

★日本レジャー・レクリエーション学会への展開期

それにしても、レジャーやレクリエーション運動と関連研究のありようを辿っていくと、第一に、楽しみ事としてのレジャーやレクリエーションへの文化統制の視野と、第二に、健康維持や体力づくりや長生き推奨にかかわる身体統制の視野を確信させる、ある種の「文化政治学」とでも言うべき論議を意識せざるを得ない。